化深
久松

秋迺七草

へ13
3393
4

門へ13
3393

駿河臺

松染情史秋七草　卷之四

文籍文庫

東都　曲亭馬琴編次

明治九年
三月下旬
山田新吉

○第七　蘭お呼ぶ　志の尾草

山里の。志のおさ戸ろ。志のめお。あられもられし朝顔の。花の氏名。

果敢なき。浅人の世は栄枯なり。さても楠譜代の忠臣津積蛭六有義は。いねる永徳元年秋の頃。主君正元の密謀を稟く。罪なき罪ふ追放され。僅に四才なりける。正元の嫡男楳丸ふ倶して。肥後国へ赴き。名を久作と更めて。菊地武政が采地に潛め。農業漁猟を生活とせり。十二箇年を過ぎ。行内国に。南朝の元中八年に。正武病死せり。時元しるべ。西海の宮方。いと英気を失ひ。武威遂に振はず。加之。今茲北朝の明德三年。南朝元中九年　千叡破の

松染情史秋七草之四

滅しぬ。正勝。正元の存亡定まるのらざる。因十月より。南北兩帝御木
睦整ひて。南帝（後亀山院）入洛まし。嵯峨の大覚寺に仙居とし。
西の果へ由空えしぬる。久世を頻ふ驚嘆し。るるものもうあんどせが
河内へぐぐとんとも。まるれより操丸。年十五才よりもひて。鄙より上京
ぬるども。容止の艶なるいとがさとし。学ぶて文武の道より怜悧。名家なし
萩ふのぐうつ。その気よあるられて。未憑しく見えぬが。久作は歌より疑はれ
るる怕害て。幼かうう楠氏の嬭母なるるを告ぐ。久松と呼びうえて。
おのぐ子とて学ぶ。るれえくも久しくぬ住吉の松の操と久後。
ぬぐ祝ぐるもうで。久松を久作を。実父とを思ひしが。十二とし奉
の頃。久作よいてるは。扨もるぐ父は。ようづの動静。土民の子とも見え
りはど。先祖はいるる人ぬるるる。名告とし。と問より。久世は涙

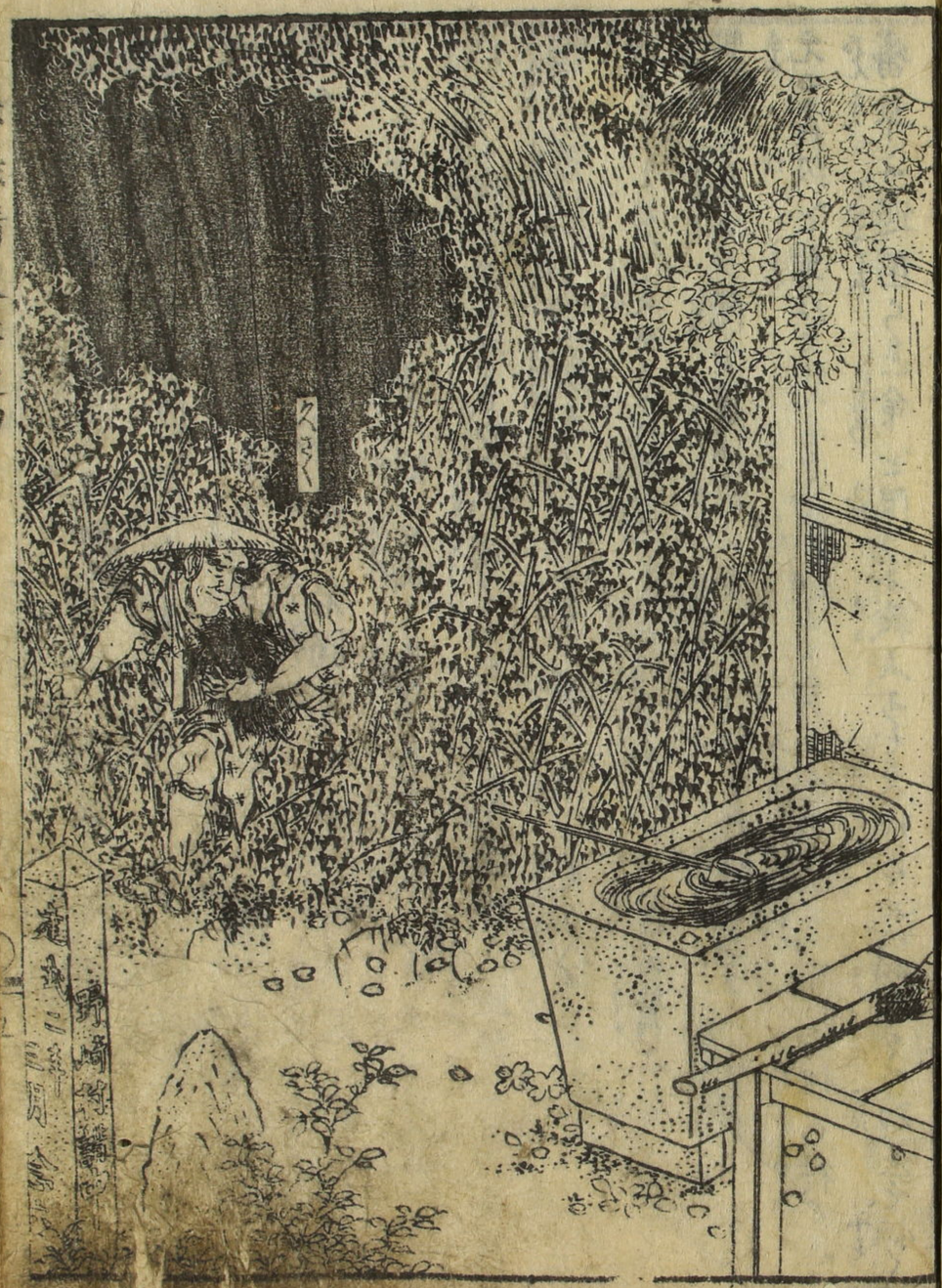
涙を落しぬ。おん身が問とる。究くうつ。れは壮年を過ぎ心。河
内の國司より仕ふし。が妻なるものを世を早くし。刺悞あるて。彼此
を追放せるまし。久世間を形るる。受くく。鎮西より漂泊せる。又久
久は。るぐ実の子ぬはあるぐ。三才歯。四才歯。とおぼしき頃。河内なる小
松山の麓なる。捨ひしが。園子なるれば。父母を。誰なるんれえるぐど。但
濃州曩の裏より。野崎の観世音を刻る小像あるる。るるんぬ
親の形見なれば。日来秘蔵しぬ。と。るるるるるるるふ
せ母しく。ひつて。言の叙なるく。黙止る。毒告るるぬど。今
時毒早し。北才ぬるるるぬ。ぬぬぬぬ。ぬぬぬぬぬぬぬぬ。と涙しぬ。四巻
まるば父松ぬる。原来るる弟を園子なるし。父親の手一つあるる
ぬ子なるし。生産の恩より。高し。るるるぬ心年月を

過ちをくやみ悔しれと信ずべきなり。いま孝行の事しるべし。久作はいと幼若なれども主従なるべきを忘れず。ふり返つて。その名を操丸と用雅なれば。久ふ漏らしものふるものもあるべきなり。時に明徳三年十一月の上旬に大和河内の凶音聞えしに九州へ出でしかば。久作八十二歳の憂苦をなげき。正勝正元の父幼なりしとぞ。有一日久松ふいに出て。河内に故郷なれど。彼処の親族朋友も死果てぬ。音耗なるは四五年。十餘年をへたり。その地も年来の兵乱に土瘦民労して生活の便著いと薄し。河内を憚る国なれど。今は暇の年を経て。故郷へ帰る人もあらばと思へば。故郷へ帰るべ。行装をととのへつ。寒家の整るものもなくて。一蓋の笠一條の杖。草鞋の紐を結ぶ外に。旅の准備もなくて。西海を起程し。久松ありしも。夜に宿り日に歩して。十一月下旬に。河内国讃良郡野崎の郷に著く。まづ親世音の堂守なる。老僧を訪ふ。彼も五年已前に死りて。今の堂守なり。黙善と呼ぶ。前の堂守が弟子なりしその性の愚直なる事。師に又まされば。近郷の農夫なり。これを正直坊と渾名しつ。さて久作を然言ふ。つぐ肥後より来たるる沢告。舊の老法師なり。親しみ慕ふを物がるふ。正直坊も。楠の残黨なりしかねど。親子が便ある趣を悲しく。ふり憐れいと親切ふりをして。両三日堂内に寄宿しのち。久作も久松もいと憑しく思へり。次の日村長ふ相潭。野崎の郷。猪を知よ。ありて空房あるを購ひ取りて。久松と名ふ膝を容れ。親子二人。ともかくもして餬ふよ。一畝の田園も所持せざれば。久松も日毎ふ。野山に出て薪

刈。久作を薪を樵。或は人ふ傭まく馬を牽。幸じんあるの春を迎ふ。かゝし程よ久作を。潛よ世の凡夫を同くふ千劔破の城没落のとき。正勝八十津川へ漂流せしが。箭傷愈ぞ去年の冬吉野の皇居へ参ようもあひつ。又正えい六田の山里よ隠ゐて痍の愈るをまち堪ぞして。洛のうへ赴れるひぬとい。南帝入洛まりもせんべ。憤ふ大ようは違わど。當下久紀を。はしぐと思ふ。延尉正勝墓ゐくいうひと。いと悼しれど。その數くゐるひる。河州正えは勇敢武畧兄ゐ勝ま思へべかるふび洛へ潛び上ようく。室町将軍を担ぎんと思へ入ふ思るるぞし。さぶらんも京へ赴きぞのみもしく環會とそゐうと。楠兄の恙ゐく成長しゐるうを告まり。その先途を見進ゐまぞやと易ふ

まゐく。久松ふ思い宿弧おうて。長谷清水両処の祝世音へ参詣し道の次ふ洛中の昊場をおがを参ん。と思ふよ。五七日が間ゐ苗字志思へと。宮えおれ藁苞を脊負ひ。匙筒の柄枝携ゐく。通路を食しゐ洛を投ゐく起れゐ。頃を三月の下旬。旅おゐ絵を春の日中ふ憂雲のうる世ふ。ゐれのを秋のを思ゐ。遂よ洛へ思しるその日よ。今朝日岡よ参れゐる。楠正えの首級をゐんとゐく。人駿奔走を。久紀をその形勢ふ。ゐいゐふと驚れ患ひ。路の傍ゐる茶店ふ立よゐて。緯の趣を問べ。主人答ゐくそのゐ室町将軍。四条河原よ桟敷を打しゐく。田楽を商せ紙。楠正えを憎ゐくゐるふ。近臣ゐれを防ぎ戦ふ祝ふ。室町どのゐ聞ゐ入つ。正えい比類ゐ紀勇士ゐんべ。ゐふ隨よ血戦しゐ。遂よ自殺しゐ。首級を日岡ゐる山蔭へ参ようを。されべ是をゐんとゐく。衆人の驚

文作夜
正えの
首を
埋ひ
五九番



まるるぬと物ぐるするふ。久世ども嗟嘆し。僅ふ後まもなく正元の
末期より来りの八ざりしをふく意中より歎けども後悔そよまれ
ぬ。ぬくちん首級をも盗とりて故郷の土とりまもりめとおもひ
つ。やがて日岡ふ赴き。群集の老弱よりも雑ぐく。秉炬を仰上れば
生ぐるぬ勇士の首ハ照る日岡より亀とまく。野の人より見とまるへ。ぐる
浅ましと世をまるるぬと朽惜くも悲しく。遺恨より涙禁めの人どもで
憤を忍びつ。人より疑ふ事なく。樹の蔭より走りぬ。その夜を化て
過ぬ。と思ひ定めりぬ。甲夜より日岡ふる。石の地蔵の背より身を潜ます。
野伏の兵ホが隙を窺ふ狙ふ。更闌く誰とぬまどぬふ怪しく。正
元の首級を奪ひぬんとく。竊びよるあ三人ありぬ。ひくハ件の徒ども
番卒より遮留ら命を限ふ戦ふ事久世ども騒ぐより紛ふそ撓く

首級をぬ抱き。足ふ信て逃ぬ。（この段詳ふ三の巻ふ見え）方ふ色両虎食を争ふ
ぬより孤ぬの虚ふ乗じぬふ類ぬ。ぐる程より久世ども。通宵走ぬ。そ損州ぬ。
河内路へとゆ走ぬ。世ふ憚ふ。正元の首級を葬ぬ。次の日
ぬ走ぬ。志紀の毘沙門天と。野崎の観世音ハ正元年末
信仰浅ぬ。大悲大慈の境内ふ葬進ぐ。并の引接ふ。
冥土の苦艱を脱ふ。と深念ぬ。その夜夢中の比及ぶ郷
近くゆ来つ。邑を踰く観音堂の辺ぬ入。薮蔭の土を掘
起ぬ。首級を瘞んとぬふ。一挺の鋤ぬ准倣ぬ。腰ふ挿
の頭を結去。その柄をりぬ。ぬふ堀ぬ。ぬひの外ふ夜ぬ深
ぬ又野崎の村長ふ。鉈手ぬ老人ありぬ。それが見子九郎
り。今茲三十を一期ぬ。二月のぬ世ぬ去ぬ人の長

とくうるり。かくてあくるまあくねべ。親族隣人ゑ連ゝ是。ろ日ハ中の道
と。日下の里の間ゑる。吾根寺へ送葬ゝ。棺を擡出ゝ。川上や西
ふりん。龍間川の水俄頃ふまて。渉ゑ。ハ川常ハ膝の節
を浸ぐらゝる浅ゆれど。水まとゝ流ハ。急流矢のごくゝて。松も代も神
とゝるふよゝ。ゝ。ろんども水の流ることも。又連みゝく。四五日をゝ
沈平が親族ゝ。棺を川の上ゑ扛ゑ。川ゝ渉ゝ。ゝふゝん。と綫ゝる。一人ゝ
ゝ。ゝくゝも。ゝの川を渉ゝ。吾根寺へ到ゝ。ゝれゝとゝて。
棺を扛ゝどゝんも難儀ゝる。所詮正直坊をゝらくゝ。棺を観音堂ゑ
入ゝ。二三日ゝ間水の流ゝ。彼坊主ゑ守ゝ。ゝふゝ。衆皆ゝん
ん。ゝゝん。と癒ゝ。獲ゝ棺を野崎の観音堂へ扛ゝ。正直
坊ゑ綽の越と告ゝ。憑ゝ。ゝゝるゝ。出家人のゝゝれ。固辞ゝ

なゝ。然ゝ吾ゝ。ゝゝゝ。ゝゝ。ゝく。須臾ゝ。皆飲ゝ。棺を
堂内の隅ゑ扛居。屍風ゝく。ゝく。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝ正直坊ハ。ゝゝ。新亡者を領ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝ。ゝ生道公のゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
雑ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ紀友ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。正直坊ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
信ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

雑く。狐の人を憑す。或い妖女の死しく夫を害殺しるるんと。
なぐろくしに物ぐるのごとる行く。正直坊も忽地に面色土のごと
るるる。其知るまるる。それハ今夜。何ぐ庚申待に来るといひ
を。直とうち忘れるる。野草模のぬ。ぎ一留守くぐといひけて。忙
しく法衣引被。囊火ふりてしく去るれば。出九郎ハもうあ
くく。黙黙衾衣とる生くうち殺ぐ。そひの外に曙るる。その夜をあくと
るるとるるぐちく。枕引よ眠らんとるるふ。怪しもべ。前面るる薮の
内るるぐくとるを犬る孤るる。枕を敷て吹くに人るる。こハ不審と
ちくふぐ。端ちく起生く。竊に窪のを窺ぐ。まるく薮の蔭を掘ぐ
ぐ。何るるふると。出憎くく。つと燈火をさく向て。癖者と呼びかく。
声の後ともに薮の中るるるしと打洗現ふ。出九郎ハ袂を提きく。

その刀ふ差るるけ出ども。よく認んと。そくくぐ。叫苦と叫びく。仰
さまふ倒出るる。當下久俗るる。正元の首級を埋果く。徐う堂の
縁づく。出るるるつるるふ。るぐ打仆ちハ。郷の壮佼出九郎るる。
這奴究く悪棍るれど。るれふ干く恨もるれふ。あるる罷逃るる
るる。と今更に痛しく出るるぐる。大るるのまくのふるるふこと。
るる出鬼ふく。薮を潜るく脱去ぬ出九郎ハ死しるるるるる。
久俗を楚と認るれば。出るるる刀を起しく。まる打るる洗現を
引抜。灯光にさて寄つ。るれるる見出ば。又物るれあるぐ。柄枕の鞘
ふ。河内國濱良郡。野崎久作と写しくれば。ふるく敬び。ぐく指出
まく。薮蔭にいゆれく。目今物を埋めるる人と出人知を堀起
土中五尺可ふく。人の首あるる。るるるぐの悪棍るれど。犬るに薮

引出さぐ舊のごく。土を覆んと。あらうしが。怨地より奸計を生て。件の首級をもく。ゆうく。観音堂の縁の下へ収入れ。魔除の爲ゆゑあんどうん。棺の上へ載うる。刀をうて。遽しく蓋をうち開らん。死人の首をうれ。誘しく。双と鞋より納め。首を藪蔭より埋めて。柄杓の鞘をうく。おのが股を突傷う。又仰さまふ倒まく。正直坊が妻と共に。黙言へ。嚮より出九郎より驚冷され。隣と里人が家より到て。壮伎ホを呼び起し。如此くのうあるふ。今宵も御堂より通夜しくしたべと憑を吹えて。両三人を殘りて帰ゆう。さて出九郎へ。血より塗まく縁類より倒まく。棺さへうち開れるが。渤九郎が屍より首へうて。ちへそもいうふとたうふ。衆皆大さに驚れ呆まく。まづ出九郎が面へ水を吹うけ。藥剤を口より含しそ。声高ゆうう

呼び活まば。出九郎へ。やうやくふ。これよりくうるうちし。改を樓正直坊ホを思うて太ゆうる息と吻れ阿佐ゆしく。世より盗賊も殺あれど。死しる人の首を盗うへ。いうるる物数寄みうめうれうれうの盗賊を生拘んとうく。却一拳より打ふされ。剣太服をさうイノ突まく。敢まぐうもめうど。件の賊へ。やうく棺をうち開き。屍の首を剣く。藪の内へうく埋めう。忽地より脇去りうるを。夢のやうよかぐえうう。世ふへ怪有ゆる奴もめうう。と虚言実言うち雑く物うれば。正直坊ホそ。やうく果まく。その盗賊へ。ゆうる打拐ゆうし。怨まるめゑあうぐや。と問より。出九郎答く。楚と怨れど。こゞ郷ゆる又作う仇ゆう。打ゆうる叶能そ。證据とうぐさうめうやうくんゆう。いひてさて出まる紙。正直坊そ。里人とまりよつくえく嫁ゆへ聲

その能よあらんと。柄枝の鞠なり。野崎の久作と寄しられがたれよ
ちと證据にあらじ。ゆゑ於主よ。緯の麁を告げんといそげ
て。一人の壯伎を。村長陀平許走らるよ。陀平ハこれをゆて
且驚き。且怪しく。その人とまるよ。崎く走り来つ。彼の長衾
浅よ。春の經夜ちろろく明しう。さて陀平ハ。出九郎がいの隨よ。
薮蔭を堀ひてゐるよ。果しく土中より。瀬九郎が首を掘出しぬ。
當下陀平ハ。衆人よ對ひくいのやう。世よ武者徒行といをとう
猛者よ。人の首を。國くの異場へ埋めく。首塚を築といふる。彼久作
ハ。近曾ゆゑ郷へ流来るものみとく。牟貫も定るゆゑど。ゆゑよ武者
徒行の類なるべしゆゑ私ハ計ぐく。出九郎ハ證人なりられと共よ
某ゆと誘引しく。ゆゑく山魚が老臣。縣守何がゆ宿所へ来りく。

一九一十と訴しりべさゆゑ久作を捕捕べしと下知せらる。俄須よ捕
兵を向ら且ゆゑ。ともゆゑく久松ゆ又久作が昨夜深く帰り
ける。結且ゆゑ放ふ睦しく。その翌ハ朝ゆゑよ起く。火を打水を
汲ゑ炊き果く後よ又を呼び覚しく。早飯をゆめ。ゆハ長途
の疲労もあるべれん。休足しゆゑ。といひ慰め草籠を脊負ひ利鎌を
携ひ秣刈みとく出しるが。道十町むりゆゑ果ゆ忽地よ胸うち
騒ぐみゆゑ。家よ老ゆる親のあるゆゑ。何とゆく心りとゆく其如ゆ
ゆくくしゆゑ宿ちくゆるゆく。前面を佶と見出べ。縣守の鞍兵
五六人。村長陀平と。野草摸出九郎を後方よ立し。久作をいく。
縛く来よりゆ。久松ゆゑの形勢よ驚ひ悲しく。路の傍よ跪居しく。
縣守が鞍兵ホよ對くいりるハ。是ハ久作が一子よ。久松と唱ゆゑ

久さく

久ひで

ふ待り。抑るゞ又さ。いろる罪犯よりとゞ。かく縛めるゝ人やさ。

ふるゝしゆう。といひゆあくど。さゝ入るる涙泉のごく。ゝゝ拭へども

ぬ。歎へかるゞ久作が。物いひとげよ之在べ。兵士ホも木石るるゝ

いと哀よ覚ゝ。久松を見ゝる。汝ゞ愁傷理ゝれど。久作へ昨夜の

崎の記青堂よ潜び入り。村長沱平ゞ児子。瀚九郎ゞ死首をゝれ

砂ゝ。首塚を築。剣出九命よ浅痍負ーるゝよう。ゝゞ們縣守の

命を稟。搦捕ゝ將ゝくゆくゝる。願ーゝゝるゝあゝべゞ。沱平と生ゝ

よ勅解ゝ。ゝ縛ゝとゆよ命を生せよ。と説諭ー。久作をいゝゞーゝ去

んとーゝりしゝゞ。久松をいゝゝうち法へつ。慌忙ゝ。繦縛よ携ゝ去を仰

ゝるゝゞけ是ど。ゝゞ又ゝ年老ゝれべ。人とゆめゝゞひをゝどゝて

を象教よゝゝ。ゝゝく物のめゝれをゝふゝゝぬ所ゝよゝゞうゆ覚ゝ。

ゝゝ恨あるゆめ。絶言よ作べーゝゆるゝ證据ありゝゆ。耶法を

こゆゝゝの。五十よあゝる老ゞ牙ゝゝ。獄舎よ繋是ゝ打是苛ゝ呵責

ふ労是ゝゞ。果ハ朝の露の玉。碎ゝくゆの紙ゝゝ子ゞ一生法ゝゆ叫ぶゝ。

いゝゞゝのゝひゝゞゝゝべゝ。さゝゝゆ脱是ぬ罪ゝゝゝゝべ。久松を縛ゝ。又を許ゝ

ゆひね。とゝゝ口説ゝゝ理ゝゝれ。久作ゆゝゝゝ作ゆゝゝゝ諸ゝ。千行の涙を拭ん

ゆ。若ゝゝ胸を搦んゆ。素ハ背へゝゝ。手の。ゝゝゝゝゝゝひよ岡えゝ。

ゆよ久松。釈ゝゝ子を慈ゝ。禽獣ゝゆ異ゝゝゝゝ。況ゝ義理ゝ

ゝれゝゝ。ゝゝ玉椿の八千代まゝゝ。ゝ神よ祈ゝぬ日ゆゝゝゝ

代ゝゝゝ縛ゝ是。命ゆゝゝゝ惜ゝゝゝ。ゝゝゝ冀ゝ孝行へ。喜ーゝゆゝゝ

ゝ。今茲ハ十五よゝゝぬ是ゝ。年来又ゝゝゝゝ行を告ゆゝゝゝ

ふゝゝで悔ゝゝ麻糸の長き別是ゝゝゝゆ。死ーゝの後ゆ彼君へゝゝふ

ようるべし。護身囊の観世音。親の像見を忘れるのふ。なぐらめる亞
よ水鳥の志紀よ名高き妻門天野崎の郷ゐる観世音。朝ゐ夕ゐよ祈
るべ。終よ実の二親を。名告もゑじものハめ。と河内よ勇れ楠の椎枝ゐう
とハ告るねく。ゑるゑるどもいひ遺を。言う紫ぞるれ罪人の。名を十老の
根よ入る。春の餘波の花曇晴ゆるを。嘶つとハ。ゆるゆるそいと。嘶咽
久松いよく號哭。義理ある子とハ情ゐる。艱の恩高れ。とうの親を
えゑく敎しく。ゆるゆる父母恵ゑとハ。老ての愚癡欲。疑ひとう。ゆるが身を
代らしゆ人ね。と訪解つ口説つ貴縁子さへ煩悩の鞭愛惜の絆
ふ犯ハ意の駒よ。いハぬも生きしゆ。流ゆ死を究める。
久作ゑ声を激し。ひるれるれる紙ゑれ口説ゑ。釈よ罪をゆさとるハいと
愚るゆ。と叱りゆ果ど。兵士ホを呼ゑうて。誘ゆ。と會釈ゑる。健気
ゑる親。孝行ゑる。子ゑ。注ゑくいと猛き。兵士ホも袖濡ゑ涙の河内
ゑゐ。安ひ春の野崎の村雨よ。四鳥の別ゑ五六町。後よ跟子ゑうしゑ
髪引ゑ。ゑくゑ親ゑ後。ゑひゆゑ。ゑく哀ゑるゑ。

○第八　女郎花よ稱る　芍薬草

誰が折る。嵯峨野の原の思ひ艸。ゑれるれるゑゑ花ゑゑとも。舊の根と
ゑゐもゑゑね子の久後をおゑひる。親の歎ゑ故ゑとも。曉孫が久松ゑ。
只ゑの罪よ代らん。と願言も絶く稱ど。哀慕の涙ゑるゑく。兵士ホが教
ふゑゑて。村長陀平が家よ到ゑく。父の悞を勸解。義ゑ出九郎と
寛ゑふ。人の性い。おのく善ゑるゑゑる。陀平ハ勿論。悪棍の野草
槙ゆ。久松が孝行よ自を羞ん。彼が請隨よ。三人齊く。縣字の宿
所よ赴ゑ。久作が命乞をゑふ。此度洛ゆハ。日岡よ鳥ゑ生ゑる。楠正ゑが

首級を奪ひ去る癖者あり。倘久作もこれらの支黨にやあらんと〻
許されず。久松ハ忽地に望を失ひて。只このうへハ神仏の利益を
願ふの外あらじと深く念じ。朝に夕に野崎の観世音へ参詣し夜まで通
霄御堂へ籠りて。父が罪愆を釋しめたへと祈ぬ。さる程に龍間川
の水もおちつかけれバ。陀平ハ児子勘九郎が首なきからに。軀を尋ね
来て葬送し。さて今般の椿事に。かし出九郎なりせバ。わが子ハ肢體
不具の鬼とならねべけんとて。只管に賞嘆し。せめて出九郎に。銭五貫
と。新しき布子一ッとをとらせしかバ。野呂摸ハ。それ課せつと密に飲べ
きひの外に。襟に垢つける布子を被て。絶まなく酒を喫み。残せる銭を
聞しその母十貫にもせぞや。と針妝しが。人を寛く。かのれを刺せる浅
まれバ。亦立地に人に取られ。かくはじめにも似ざりけれバ。大に後悔し。

更に一層の悪念を発しつ。つく〴〵と尋思するに。彼久松を活しおかば。稀
なるべき美少年なり。時勢粧ハ男色さかりにして。浪速津。堺なんどの辺
男色を衒く生活とするものあり。されバ今や。大和遊歴をとなく。寺川
に両三日逗留なして。ひそかに浪華の旅客を。彼衒郎の親方なり。
いかにし迪らし久松を誘き。彼親方に周銭あまた賤の金を得ん心しきもれ
ども久松ハ。年なへましく怜悧に。庸常なそハ謀がたし。とせんかたなく。
肚裏にかく問答し。佶と思ひはからひありて。その日乃黄昏に。観音堂
の母よりを排徊し。堂守黙首が。厠へ登る間を窺ひ。奥ふかく
入りて。本堂の厨子の背に身を屈め。小夜の深るを待てたり。さて久
松ハ。観音堂に通夜するまで。既に七日に及びしかバ。正直坊も孝子の苦心を
憐みて。とかく物食ぬや。湯ハ母しらぬや。と問慰るに久松ハ火食をたち

行基菩薩と固辞す。水をすすめて飲ませ。祝をなすに。かくのごとくなれば。正直方
はふ〳〵嘆賞し。彼少年を通夜する程に。彼を放して睡りをなす。かくて
その夜も深更に成ぬ。久松を召ひ労しく。寝るとも来るべし。若し目は
睡らるる。義あやあらん。現あやあらん。戸帳の内より妙なる声して。久松
久松と呼ぶ。汝ホ釈子。それを信ずるといと深し。久作が禁獄
を救ひ出さんとなるべし。出九郎は相潭す。身を捨てこそ深山頼もめれ。
と示現しぬと。驚き覚す。霊験あまりは掲焉なれば。久松は
坐を感涙を拭ひあくまで。ほくぐとと示現の趣を案ずるに。彼野草植出
九郎は行状ようなる破落戸なるぞ。とて紙銭をと示しぬ。
を。一切を給ぶとて出るぐる。九郎愚をなす疑ひまんいものと。屋町
嚀に冥助を祈念し。天の明るを待びく。仏前を退く。出九郎は逢ん

とて彼此を密るに。未下刻野崎の々精舎なる茶店の
傍にあるひね。当下久松を。遥よりなるを。嘶と呼けて。
喘く走る。ずく樹の蔭へ誘ふて。説世音の示現蒙りるを告
只管救ひを求るあるを出九郎は呆れるあり。これは智なる
もなり。いかで久作を救ん謀あるべき。そは戯れとなるべし
ものとぞんじ。久松を母叮嚀に懇を吹えて放さで出九郎は
沈吟して。やうやくふいの事。ほとく縛を案ずるに。千金の子を市
死るべきとのみなる。久作が罪とて捉へ原を人を殺せ
ふものあらば。只屍の首をとれば欲するのをなれば。救ん方ものべ。
そもそもなるべく。龍間川へをとり〳〵水出く。郷民旅客。只この水
ふ苦しひる久し。その水の倍をなれば。船橋をとけく人をとこば

五百羅漢建立
寶鏡箱
玉九郎

自他の幸すくなれど年来の軍勞ふかく労甚く企図ぐれのこと
なれば主となりて紅橋の料を寄進せば。その功よりて父の罪を
購べし。なれ如何ぞ施すべき謀なりとの。久松これを聞くいかで石
道理と稱へ。志ありとも貧しければ分の分際なく。殿の金を調へ
ざる。別に術はめらじ。と問を出九郎は聞もめへどされべらよ。
今そのとが物ありせば。親世音の示現なもを捨てそ保せの
めれと諭しまるふめらじ。打ちそらけ是。浪速の旅客に秋艶郎
の妻方雛家吳四郎といふ人寺井なる釈族の家に留られ是へ
野崎の観世音へ詣で。直に故久しくなるとく。彼処の茶店に憩ひ
釈の為に。その身を售んとなりべ。媒妁しく沿ことべしといと信く
しく誘ふを久松そはくとうち聞て世に幸なれ婦女子が親の

為同胞の為或は自の為奔ふらく。憂汀州の淚ようやく流
て。男子と生まれく色を衒ひ。酒に侍り枕をなめ。賤の客とかる
るる睡ぶんそ。いと朽をしとぞども。観世音の示現もなれば。こが
志をとえんせるる。一旦父を救ひく後に死るとも生るとも。祈めば。
と深念しく。ふるびもうち点沈男色に身を售んさん。絶く
願しるねども。世俗の常言に時の要に臭も則ぐ。なれば身
のでれりのくとも。金ふに代べくは。媒妁しくあるまじと。
出九郎は為課しと。密に欲びぐく久松を茶店に招く吳
四郎に汲ましに。かのぐ従者ありとひしらく。彼が孝行の一五一十を
告く。賣身の為に相譚に吳四郎は。久松を一トしびに。
浅樹を引るこちし。且その至孝を感激しく。一銭も及ばど。年

季三年を限りよ。身價三十金と定め。腰なる墨斗の筆を抜き出しく。一枚の證文をうん写め。こは出九郎と久松が印信を折と。さて身價を遍よりう。その日浪華なる。山迹家丹五兵衛が妻。所也女房。操丸の在処をもとうん為よ。大和河内の灵場を巡礼し。野崎の観世音へ参詣しける。賽よ徒者が草鞋買んと云程よ。あるが茶店よ尻をうけく。久松が親の為よ。身を賣るうを堪へしば。坐ふ感涙を拭ひめくど。かく我孝子よ恵んまん。三十金も惜うもど。と深くころよ憐をうぐう。除める略費も。夫ふ告ぐしく。男子さらんものゆへ。施しぐど。と恐止つ。年未窓る操丸を。その久松をうどとうもうでぞ外よ立別れ日ありうど浪花へ帰りうく。夫丹五兵衛と。ふ深ホよ。件の孝子の物がうするふ。衆皆涙く感嘆し。

さる少年と將ゝ帰ゝが。物の要ようべたりの沢とく。丹五兵衛ハ殊更ふいと情をるとうん。案下其生再説久松ハ身價三十金を受とうく。英四郎よいへう。実しうぐ。その金ハ又を救めぐ料なれが。両三日が行身の暇をあるべし。そのうよく圖うるく。又よ別れを告くこそ。といへも果ぐ。英四郎ハをう掉さるぞうさるるやあらん。既よ身價を遍よしくハ半晌も放ぐく直ち浪速へ帰くもうめ。誘めく。といそぐ。出九郎ハいと便るく。と咳く。久松よいへう。釈方の宜ハ不理るれば。その金をうれよ須よふ代ア。久作を桜ひ出し。ぶく音耗ぶぐ。そのうへ費しそと。懇切ぶうよいへ嫌せども久松を一をうワ。何の為ぞ恙なの死。祝の魚を又ぐて出うへ公ふど。といく

へ整ド左せん右せんと今さらふ当ひあたひ瞻る空よ盂夏の日ひげ
ころろく翠微低く頓くあそ五四郎いまとく焦燥とうろく
も久松が手を引るわしもあれ茶店の但とを過るめめ。これ別
人よあらぬ正直坊黙善るり久松を見を忙しく呼び入れ
つ忽卒ふ緯の顛末をものろう老師を緯号を正直とはれ
ものよいと憑しく思ひまつる。この件のるれ托を進ぜるこのかり
もしく又久作を購ひとりてもひねと涙とるりよ頼を少え茶店の
あるじよ硯を借りて牙價三十金を包る紙へうぐゆく外と釈方の家号
を写しくこの金を正直坊ふ遍与せりくび然善を頼よ涙ちちうこそ。
件の牙價を懐へ楚と挾め遂よ久松を々稍号外まで送りふけ是れ
久松まるの叮嚀よ又のるれ憑を受え五四郎よ伴まく綫りあり

取欲を分ちぬ。かり」うが出九郎を昨夜久松が仏堂籠りあるを知り。
観世音の示現と少しく緯八九分ハ忻ぶるよ身價一段ふ至りく。
三十金を然善が懐ふせ〻まーくが緯終よ労して切るく直と采まく茶
店の但とりふ。ものろう忙然とを立在しが遮莫彼瘦坊主を観音堂へ
ハ及さでとく遽しく裳を引折鳥も時くいそぐる雀色時こーゆは。
と並樹の蔭よ身を潜し正直坊がゆるるを今ろうとまつ待よ然
善ハ久松を々稍号外まで目送く暮果る日の公のそーく観音堂を
投く走り破ると埋伏しくる野草植を樹の蔭ふ跳ア出声ごよ
うけど然善が法師天窓を礫と撲打まく叫若と倭僧るのうく
出九郎。とハせも果ど手拭咽喉ふ纏著く。忽地よ猛叫しく
屍よ騎かりて懐をん探り矢庭よ金を奪ひとりつ押戴きて逃

て。命吉との口を。ふぶ手を押さく慌しく手拭ふ。くくふ被りて九
とゆく脱去ふ。さる祝は畑打果て主婦る農夫二三人夕月夜の隈
ふ紀は正直坊が仆はるを見て。大紀は駭き抱き起しく。さまざまに
勦はべゆうやくは魁生ふ。原来死ぞふと。散動ふ。猶く飲
音堂へ舁ゆく入は医師を招紀。近隣は告ゆ。湯茶をふめるど
ふるは結且は到はそはいふ。悉ふ紀を弘ふ。当下然吾は里人ホ。
戌ふ。ざる奴絶を欺び笑え。さく久松が冠を售る孝行。出九郎が
暴悪を彼ふちゆく物ふ。ふれ久松が冠價三十金を野草摸
は奪ひそはは。ふれば彼親子の面を覩ぐて。各佐愚僧が為は緯の
趣を所ふくさとの。里人ホふれを笑く。ふく久松が至孝を稱
嘖し且出九郎が兇悪を憎ふ。ゆ村長は告ゆ。ゆ紀とゆは縣守は

所ふ。縣守ゆ久松が純孝を嘆賞し。遂は久作が死刑を宥く。
野崎の郷を追放直ふ出九郎を禁獄ふとく。俄須は捕兵を
向らはて。が野草摸ふいちはく逃去ん。絶く所在は志はざりき。
かくく野崎の久作は。ふひの対は放さはく撫の獣の山は入く殺のるの
野は帰る。紀はそゆ久松が冠を賣る孝行を笑くは悲しく。浅
はしく。釈と呼び子と呼ぶ。世は憚るゆ恐るるふ。ゆふは深く慮て
幼少はは頃ふ。楠殿の孺君ゆく為ゆは主るふ紀。告ふ
ざしび難はふ。ふひく。金枝を悞く。糞土の墻の餒て。樹数
郎とゆうはは。ふるふのび罪ふ。と紀の八千通慚愧しく絶は野
崎を追ふ時は正直坊恐吾ふ。里人ホとふ。紀を郷の出
目送ふ出九郎は久松が身價を奪ひふはく面ふ紀ふと語落て

件の孝子がひつるさ紙告よるんば。久作ゆゑ〜いくらうも迄三十金ハ皆
ひよ足らねど身價を親方へ贖ぎれが久松ハ井よ墮る的舟よ乙と
く。張引揚るこいと難し。さそも彼が親方い何地の人みく名ハ何ろ以
ゆんさらしゆえうと問バ然吾ハ改をうゑ拵彼親方の家号ゑんどいと係細
金を包る紙の上へ。ゑ字〜く遍与さん〜ぐよ〜もゑどーて懐ふ甘沢出九
郎よ奪ひ去り出〜ぐるんもさらぐと回答るふ久作ゑ頻ふ焦燥ゑ。
ゑ衣人よ問よ。ゑるものゑるしゑべ。ひゑゆゆさく〜嗟嘆〜。ふうそ男ゑを徹
ものゑ京浪華よ限ゑ。さらべ彼地を索んゑく然吾ホよ別を告ふハ
沈めびこんゑるぐゑ歩の運びも定ゑるらゆやく杖よ扶ゑ乙倍を投ゑく
ゑゑ死て路ゑぶらゆふ。観音堂の薮蔭よ。ゑぶ埋る首を正元の乙
首ゑ。と人ゑらべ孺君のゑくも危ゑるぐゑ乙よ出九郎が思計ゑく。それとゑ

ゑらゑぐ測九郎が屍の首を埋ゑく。物怪の幸とゑゑよゑんど吾君
の仇首級ハ。這奴何処へゑ捨ゑゑん。鴉の觜のゑ〜ゑくも緯ゑゑ既よ齟齬ふ。
さそもうゑそ命運ゑゑと只管よ嘆息〜形ゑん身の形ゑん旅寓懶
く日を過しぬさる程よ夏も果て。七月十六日よゑゑぬ。京浪速の風俗ふそ。
千蘭盆の昊祭せ。ゑゑの供物或ゑ土筆公卿膳燈籠ゑんどよ至る
まゑゑ夕河原へゑく出て燒ゑゑれを精灵の送燎と称ふ。その所為
正月の爆竹よ等〜俗説よ初春初秋の十六日ハ閻王の舟日ゑく地獄
の釜の蓋もあけべゑく商家の小厮ホハ。ゑゑ許さんく親里へ赴くを。
薮入ゑらふゑん五雑俎よ所謂走百病よゑゑゑゑゑゑゑゑゑ俗ゑんを薮入ゑいふハ
ゑゑハ縣ゑゑ草ゑゑ田舎へもく友ゑゑゑ。さんべ七月の十六日ハ。今ハ十四日ゑ托女
治郎ゑんども客代ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ意托ゑゑゑゑ。不頭山迹家丹五兵衛

木曾牛男義仲
ゆうさく
あれ
丹五左衛門
久米の

は古主正武の三回忌なるに。正に是文野前なれ。今茲盆なりければ十三日
より盆棚ひとつを祭りつ。十六日の曛昏に。親子三人河原へ出て
君を送る火も涙に湿る麻殻の煙をそれ夕の雲にかゝまでのぼる
出る月も流れて漣浪によする風さへも涼しければ。回向し果て彼此と
河原にそゞろ漫歩する程に。一限なる柳の下に。女子ぞと思ふ声して
なる美少年石を拾ひて袂に裹を掌を合して念仏十遍許
唱へつ。身を投んとしけるが。阿也女お旅木の形勢に。吐嗟と叫びて
丹五兵衛を走りよりて抱き留。矢庭に水際を退うて。やがて其名
を問に。少年答て。わが身は河内の野崎なる久作といふ土民の子に久
松と呼ぶものなりしが。思ひもかけぬ罪犯ありて屠処の羊となる親を救ん
為に浅からぬ世を渡りかねて長柄の橋のなかなる憂身を到とう

卿のこゝろざれど一旦身を売てへ。遂に父の安否をもしらざ。身価も送りし
書翰も。思ひそぶりや四月よりかふまで絶て音耗なれば。父をいかゞならんと
ん。とろかとかくする程も。籠中の鳥の悲しさは。何ともならばなる人の数に入
るべかくまでに竭せし孝も化となりし。金に仕せし身なれど。男子と生まれて
宿世居に異なる生活の苦しみまふるを。病痾ありとて客と
あるぞ。癇僧として親方の呵責の笞に打懲さるゝ。元来覚期の上なれ
ど。打も殺さるゝ懲されても悲しけれど。須磨の浦曲に潮を汲こ。
浪速の芦を刈。火打水没を漁菜つむ。業なるかくの事がれをしも
忍びがたき思ふまに。金に換る身をいかにとなふ。捨るは救も罪ふかし。この川水
に死とこそ。禁めぞ殺してあひね。といひつ涙を拭ひもあへず。又跳て入らん
とするを。丹五兵衛を背より抱きとめて手紙放さず。阿也女を目今

少年が物ごうを吟く顔うち覗う。原来そうこハいぬる四月。野崎の郷の茶店みく。親の為ゑ刀を賣うる。孝子みくめりる狀と問れて ふく説こそいふーくちりゆん。と問ゑ阿也女再こ。その名ゑ

ゑが刀いゑ孔ありて。大和河内の夷場をおがこそ巡る旅疲労ゑ。憩ふ茶店ゑ刀を賣る少年。ゑるゑ併。笑くゑ副いと痛ーくゑひーが。再び

ちゑ環會。過世怪ーゑ縁ーゑん。と綽審ゑ物ゑんぞ。久松ハ今ゑ

ふ。顔うち赦めくゑのいゑぞ。女児ゑ深ゆ豫ゑ笑く。その人をゑ見べゑの母。

ちゑめゑ丑いゆすーと長き袂を濡ゑちゑぞ。丹五兵衛ゆふーく憐ゑ。

夫松ゑいふゆう。汝その生活の卑ーゑゑ刀を羞て命を隕えと名ひ究め

ゑ仇緒いと憑り。人ハ出羞とゑ沢りく儕とと。えんがとそ死べゑんば。

汝がゑん。曩ゑ妻ゑ物ごうみく。ちゑ惜そめゑしゑ。今不意その枉

死を禁めーハ因ゑり縁ゑりゑ。ゑんゆ又ゑ。ゑゑある刀。女児ゑ深ゆ

壻がねハ。幼ゑゑ程方ゑ丑ぞ。既ゑ暇の年を経ーえんば。その面新ゑゑ

らん。えゆゑちゑねどゑぶ壻ゆ。汝ふ等しく十五六ゑる。夭ゆ年ゑなゑゑ

けめ。と思ひゆゑハ愚癡ゑんぞゆ。外のゑりとえおゆほえど。えんその至孝情

隙を感ぜるのゆゑゑ。一臂の力を竭しそ汝を購ひ生ー。野崎へゆ信

さーく。又久作とゆゑんゆゆ逢ちぞけ丑ばゑゑゑゑぞゑひとゆゑゑ。

稚技ゆ拙ゑん義ゑ咲ぞ又めふ春のゑゑゑぞゆ。と阿也女ゑ縁とゆ

信ゆふ。諭諭ちふぞ久松ゑ。手沢合ーて伏拜ゑ。ゑゑ再生の高恩

活地獄の艱苦ぞ。救ひとりとゆゑゑぶ。死とりく恩ゑ答ゆ人ハ

ゆ年ゑ信ど来る。救世菩薩の利益ゑ。感涙禁めぞ

ざりゑ。くて丹五兵衛ゑ。阿也女ゑ深りゑとゆよ。久松を抱く羞恥へ

立ち。その夜ぞくゝ雑家五四郎許いまそく。久松が牙購のう
を相譚す。彼きゝえて一夕も客と迎るの欲なみ。ひるゐ羊ろへ。
夫四郎中玉と瑕めて公おしく。りそめまゝ扨うんば。更に利欲を
忘れど。舊の身價三十金をかゝらべ。久松を進ゝとべ。といへ。丹五
兵衛欲びて。即坐に金を遍与しく。證文をそう寝し。やがて家に
帰りて。緯の越を久松に説きゝ。久松はその鳴恩を謝ゝる。言
語の間足ゝど。涙坐ふ袖を洗ひつゝ。その大人の為ゝるゝば。死を
りて仕人りの秋と。ひ定めゝ。ゝゝ信ゆふ挙動ゆどゝ。丹五兵
衛夫婦へいゝ憐ゝ。彼久松を。主管に非八ゝ立ゝ。と密
ふゝを賞夫ゝ年僅に十六ゝ。彩糸のうゝんば。小厨ふそめ
使ひ。河内の野崎へゝ。別に人を遣しゝ。久作が安否を問ゝふ。その

人ゝゝ帰りて。いふ申ゝ。件の久作は。その子の至孝にゝゝ。命を助け
らゝ。彼地を追放せらゝ。愛子の往方を密んとゝ。泣つ絡ろ
ゝゝ赴ゝ。その後のゝ行ゝるのすゝとゝ。ゝゝ野草模生九郎と
ゝんいふ悪棍。その曛昏に理伏しゝ。正直坊を打仆し。久松が牙價
を奪取ゝ逐電せり。さるふゝゝ。久松が送書も又の久作ゝゝ弱
ゝゝ。子を失ひる親の歎き。何國を辺めゝ索ね惑ふゝゝ。
ゝゝの里人が物がゝゝゝゝ。ちもゝく告げ。久松は忽地
ゝゝ紙失ひゝ。呆滞ゝとゝ泣ゝ。めゝど失婦もゝを密ゝ。ゝゝ事
ゝゝゝ。ゝゝゝ。存命ゝどゝあるゝゝべゝゝゝ。ゝゝよゝゝゝん。ゝ
ふゝひ屈りゝ。病み頻ひゝ。といひ諭ゝ程に。非八ゝ。主の丹五兵
衛夫婦が久松を子のゝ。愛慈ゝに妬ゝ。お深ゝ動も

さんぬ。久松ものゝ腹ふくれるを見て。彼を見ると雖言訳ふたつく。
さもるれこのもの仏ゐく。罵りつく責使へば。丹五兵衛も阿也女も清福
く思ひるゝ。是非八方。経営のるの紙うち任る老僕なんが。只憤を
忍びく咎ど。ゐくとる程よ年も暮そ。十二月廿日あまりよりつ。
媒婦皆もいと苦しれ。胸ふれ。うれ多ゐんどゞ。節季さもふと
門ふつも。物思ひの宿ハるさうべ。くく山家税平ハ。約束の日も近
つれぬとく。毎日ふ山迹家が店よ来く。婚姻をいそがふそ。一日く
といひ延ゞ。大晦日を限るゐんが。借銭の閑なるど。色情の山路を
脱まるゐ。お染が茂き思ひ草。且の霜と消もせず。ふるゝ曇りく
玉柳。笥ふ。ふさ紅るゝ多嬬くそ。あけても春よあふよりゐ。丹五兵衛
いまのびくよ。阿也女と額をつれめくそ。ぞまゞよ商銭をんども。

脱るゝ。彼もあゝ。所詮姫君を扶腹進ゝせく。ゝる夫婦。密よく
を走り去る欲又税平を犯ゝ。経て捨る欲。この二ッのうち。孰ゝ
ゝふん批判しそえ。ゝいよ。阿也女ゝ。ゝ。三十六の汁も。
走る紙ゝ。ゝるゝど。室町殿の威徳りく追ゝ。脱き果
べゝも受えゝ。ゝど。ゝんゝく。彼税平を教ゝ。毛を吹疵を
求るゝ。ゝの末の八日ゝく。大晦日ゝゝ。中二日ゝ。ゝく思ひ運
しゝ。と声ゝ。ゝ。丹五兵衛ゝ。数回嘆息。
その日もいそがゝよ暮ゝ。ゝるゝ是非八方。主夫婦がうち相談を
ゝく。ゝ。縁ゝ。ゝを焦を。お染を妻ゝるゝがゝこゝ。ゝ。
ゝ。この件のゝ。ゝ。信ゝふゝ。ゝ。阿也女ゝ。
物ゝ。ゝの紙ゝ。ゝ。世の人ゝ。

あやめ
久松
せひ八

あやめ
河也女
ふと
厨
久松と
相撲

掃き餅を搗し。席薦の表織かえて。障子の切張する松下の
尼もあらふ。家に親子三人ハさらに之。久松さへ物おもひが有るなるハ。縦令
がるゝの望みかなふのみなるべし。僕熟おりかに。這奴を諾さく。大晦日の
婚姻をいひ延を術なれバしもあらざ。野夫にも切者ありといふに。
なほどに是非八なん商銭まゐらさるやらんと怨ぞれバ。阿也女をられを
咎て。むかやくなえくわ。それいかなる謀ぞ。おれよしあらバ告も出せよ。
よひよ。是非八を手に於る。庫の鍵を膝挟ふして。莞尓とうち
笑ミ。問のまでもなし。大晦日に。彼痩浪人聟と称して来らんとれに。
お染を密夫ありと。既に有身ね。さらば女児なればとて。かゝる淫婦
疎まれなるべん。おれども。おん身を聟がねなり。この家を進らすべし。
女児をハ離縁の状をあたへよ。といひなへ。道理の当然なれバ。縦令

富貴綵の辯舌をもつて論破すとも。その夜の婚姻をはたさすべし。
さりいふ間に。夜もあけなバ。又いひ延を術もあるまじ。といと信く
おもし説尓せバ。阿也女を直を咲て。眉根をよせ。その謀よしといへども。
加ぞ女正しき女児に。きれ名を立らさんも難儀なり。されど一旦の謀
なりとも。堪も怒げんが。お染に密夫ありといふとも。證拠なからん。彼いかなく実
事とせん。しからバ女児にね巻衣被を。その人もなく。世間の聞え恵ふ。
なりもやせん。と防バ。是非八を髯ふり撫てうち笑ミ。かゝる女の
覚朗なからんや。近曽門に立ち。巷に停止。太平記読ミ。草斎宿
人。これらを相譚て翌の夜より。お染さまの浮名を唄し。どのやうか
世の人にしらしなバ。彼縦令も実なりとなるべし。よてのそれ是非八に。
うち任しおくうし。主の為なれバ。お染さまの不義の敵手といふてとも浮

名を猷ひゆうとぞ。おのが田へ引く水ぐち。境いの畦ぬりや。醜部の顔すゝ
げ。ゆる紅好きいと嗚呼と。ゆひ。門也女はやく。うち点頭ぶ。
深が密夫といふ。ものゝ。ゆめ。ゆるけ。ど。丹五兵衛よめよりしさくん。
固よりそのいろが家の孔明と。賞吳らん。是非ハハ喜ーげふ眉尻さげ
てうち笑ふ。ゆ。叮嚀よ。洩しめ。ゆ。店前へ退出りう。ゆ。しうば
是非ハ。謀ゆう。と。ゆ。ゆ。次の日物をう出さえ。土藏の門口
まで。ゆ。ゆ。裏ゆへ忽地門也女が声。ゆ。何ゆ。ゆん密語めん。今一人ゆ
久松ゆう。ゆ。不審。とゆ。疑ひ。綱戸ゆ耳ゆ。ゆ。一五一十を。ゆ。編
聞せり。中山堂

松深情史秋七草巻之四終